

1992年度の方言研究ゼミナール（於：神戸市）において、『方言資料叢刊』第3巻の発行についての話し合いを行った。いくつかのテーマ案が提示された後、協議の結果、「方言の比喩表現」と決まった。そして、この分野に造詣の深い愛宕八郎康隆氏を中心としてことが進められるべく、編集事務を担当する上野智子が、愛宕氏との連絡を密にとって調査票の作成実務にあたること了承された。

これを承けて、愛宕氏からの以下のような問題点が示された。

1. 比喩表現を認定できる表現単位は語・連語・文に及ぶが、質問票の作成に際してどの単位までを射程に入れていくか。私見としては語のレベルにとどめるのが適当と考える。
2. 比喩表現は、基本的には方言生活の全般を覆うものであるが、意味分野には自ずから比喩の量と質に差異が認められる。つまり、質問法によって比喩表現が出やすい分野と出にくい分野とが予想される。意味分野に限定を加えるか、加えないか。
3. 質問項目数はどれくらいが適当か。各調査地点の特色を見るためには、最小限の質問量が必要になってくる。私には、一地点 100語くらいが適当と考える。

さっそく問題の討議に入り、以下のような共通理解に到達した。

1. 表現単位は原則として語のレベルにとどめるが、連語・文のレベルのものも、質問法の延長で自然に得られる場合は意欲的に取り上げる。
2. 意味分野にはとくに限定を加えず、方言生活全般にわたるように配慮するが、項目数は比喩の粗密によって加減されてよい。
3. 『方言資料叢刊』第1・2巻の質問調査票とのバランスを考慮し、質問調査の所要時間がほぼ同じくらいになることをめやすにして、全体の項目数を設定する。

以上の取り決めに基づき、まず上野が愛宕氏の指示に従って、比喩語の方言事象が数多く得られそうな項目の選定に取りかかった。参考文献は辞典二種と愛宕氏の三論文である。

『標準語引 分類方言辞典』『日本方言大辞典』『国語方言の発想法（一）・（二）』
「方言研究の心理学的見地 —— 造語・造文の比喩発想の視点から」

第1案の64項目を愛宕氏にファクシミリで送信し（92.6.4）、折り返し送付された、削除・増補分と「調査方法・記述方法・記述例・総括の叙述方法」を加えて再考した77項目を整え、各項目の質問文・参考事象例を新たに加えて第2案を送信し（92.6.23）、原案がほぼ確定した。各項目の参考事象例については愛宕氏からの加除・修正意見に従い、さらに検討を重ねて第3案を作成し、これを携えて広島へ赴き、広島在住の幹事（江端・友定・町の三氏）に示して協議し、最終的な詰めを行った。ここでは、差別語の排除と無回答・非比喩語の処理方法が新たに追加され、第4案（決定案）にこぎつけた（92.6.27）。

また、質問文を用いず絵カードを示して質問する項目が31含まれているので、愛宕氏作成分7項目を除いた24項目分は、高知大学人文学部3回生横山留美子氏に依頼した。

以上が、『方言資料叢刊』第3巻 調査票「比喩語の研究」送付（92.7.11）までの簡単な経緯である。昨年にもまして、実地調査では限られた時間での質問調査の難しさに直面した。併せて、完璧な調査票の作成までの道程遙かなことを絶えず痛感させられている。